

総説

# 地域が教室・地元が先生・地球がキャンパス —大学の一般教育で「地域と環境」を伝える試みの20年

安溪 遊地

山口県立大学国際文化学部

## Local Communities as Classrooms, Local Leaders as Professors, and the Earth as our Campus: Twenty years of trials to teach environmental issues to fresh students

Yuji ANKEI

Faculty of Intercultural Studies, Yamaguchi Prefectural University

### 要約

2006年の法人化以後、地域貢献型大学をめざす山口県立大学での共通教育における実践の経験を、それに先立つ時代から説き起こして再検討する。すべての学生が地域に出かけて学ぶことをめざす「地域がまるごとキャンパス」という大学のあらたな中期目標の実現のためには、「環境問題」(1995-2014)、「地域問題」(2001-2004)で実施したような「地元が先生」という、地域リーダーを次々に教室に招いて講義していただくタイプの授業との組み合わせが車の両輪のように必須であることを指摘する。さらに、どのような地域でいきるにせよ、地球レベル・国レベルで流布されるさまざまな言説を鵜呑みにしないために、地域に根ざした生活者としての視点を確立することの大切さを強調する。

キーワード：移動大学、環境教育、体験型学習

Keywords: mobile university, environmental education, experiential learning

### はじめに—移動大学の夢

この報告は、山口県という一地域の小さな公立大学で、「地域が教室・地元が先生・地球がキャンパス」という夢を育てながらとりくんできた、ひとつの授業での模索とそこから得られた気づきの記録である。私は1995年4月に、山口県立大学（当時は山口女子大学）に赴任してから、学部を越えた共通教育の「環境問題」という科目を担当してきた。このたびカリキュラムの見直しにともなってこの授業は2014年度を最後に閉講となることが決定された。この授業に取り組みながら、学生や地域の講師・受講者とともに学びえたことを抜粋しておきたい。2002年度から2004年度に担当した一般教育の「地域問題」授業での経験もあわせて報告する。公立大学法人となって地域貢献型大学を標榜する山口県立大学における、今後のカリキュラム改革へのヒントとなればと願っている。なお、地域の住民を講師に

招いての授業内容の記録そのものは、安溪（2004a、2006）、安溪・安溪（2009、2010）などで公表してきたので、ここでは割愛する。ちなみに、地域への公開授業としては、大学院向けのオムニバス授業「生命と生活の質特論」（安溪、2003）と、「アフリカ社会文化論」（国際文化学部授業）を実施している。また、学生が地域・地球に直接でかける、地域共生演習（共通教育）、「フィールドワーク実践論」「地域実習」（国際文化学部）授業を現在担当しており（山口県立大学国際文化学部フィールドワーク実践論チーム、2012）、さらに、2013年度後期からは、大学院向けの「暮らしの人類学」を地域公開授業とし、あわせて、2013年度から5年間の文部科学省「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」の採択を受けた「山口学入門」の授業とも合併開講しているところである<sup>1)</sup>。

山口大学教養部（当時）で、12年間文化人類学

を教えたあと転勤した山口女子大学で、私は文化人類学と環境問題を講義することを命ぜられた。理科系の大学・大学院を出たのだったが、アフリカや沖縄の人と自然の関係を人類学の立場から勉強してきただけで、とくに、環境問題あるいはよりひろく地球環境問題についての専門的な知識があるとはいえない私に、どんな「環境問題」授業が担当できるだろうか。試行錯誤がはじまった。

授業を通して知ったことと、自分の生活や行動がどのように関連づけられるか、あるいは関連づけられないかは1981年に大学教員となってから、自分の授業を評価するにあたってもっとも重視してきた要素だったが、教養部で同僚だった鬼頭秀一氏（科学技術社会論）との生産的な論争も経験した（ウェブページ・デスマッチからライブへ）。

学ぶことと生きることを結びつける方法へのヒントを私が得たのは、大学3-4年に在学中に出会った移動大学であった。1972年、大学3年生の時に、文化人類学者・川喜田二郎氏の「移動大学運動」に加わって、フィールドワークを中心に、現地で学ぶという研究スタイルに魅力を覚えた。移動大学とは、2週間のテント生活を通して、川喜田先生発案のKJ法による問題解決学を学びながら、108人の参加者がさまざまな課題に挑戦するというものであった（川喜田、1971）。

以下に紹介するのが、移動大学の8つの目標である。大学教員になって、30年あまりのあいだ、私は、授業（と研究と生活）を発想し、構想計画を具体化して取り組むときに、これらの8つの目標を取り入れることを試み続けてきたのだ、と思い当たる。

1. 創造性開発と人間性解放、2. 相互研鑽、3. 研究即教育・教育即研究、4. 頭から手までの全人教育、5. 生涯教育・生涯研究、6. 異質の交流、7. 地平線を開拓する、8. 雲と水と（川喜田、1977）。

これらの目標の中には、キャンパス内で実現するのは困難なものも少なくない。それでも、工夫次第では、教室での100人を越える授業でも味わうことができるものもある。以下にその具体例を示してみよう。

## 1. 創造性開発と人間性解放

受講生が眠くなったりして集中力が下がってきた時には、「眠りの森の美女・美男」を醒ますために、鼻笛や口琴を演奏してみることにしている。珍しい楽器であるほど覚醒効果は高い。スワヒリ語やバスク語の歌をみんなで歌ってみたりするのも効果的である。学生に授業内容を約束するシラバスというのが次第に浸透してくる時代、予定外の授業をするにはあらかじめ教授会にかけなければならない、というような硬直した考え方は、いかがなものかと思

う。大筋はシラバスに従うとしても、学生や卒業生にも随時発表してもらうなど、ハプニングを逸せず、臨機応変に授業を進めることが、ある緊張感をもたらし、退屈しにくい授業をつくるのに貢献するのではないか。本学の学生による授業評価の項目には「シラバス通りの授業でしたか？」とあるが、免許・資格関連でカリキュラムがきびしく定められている授業を例外として、「（半年以上前に書かれた）シラバスを越えるためのどんな努力が払われていましたか？」に評価項目を取り替えて欲しいと考えている<sup>2)</sup>。

## 2. 相互研鑽

学生相互には、いわゆるアクティブ・ラーニングや受講生による口頭発表とそのピアレビューなどが考えられる。私は、毎回の授業中に書かせる感想・質問メモを抜粋して入力・印刷し、次回の授業で配布することを続けたことがある。100人以上のクラスでは、膨大な手間がかかるが、現在は、ネット上の「コミュニケーションボード」に受講生が直接記入する形になったため、入力の負担が大幅に軽減されている。学生から教員へは、学期末に、学生による無記名の授業評価がある。オムニバス講義の場合の、担当講師間の事前事後の打ち合わせや分野を超えた研究交流も、相互研鑽として非常に重要である。

## 3. 研究即教育・教育即研究

私の授業では、たとえ相手が1年生であろうと、自分がいま取り組んでいる研究を紹介する部分をできるだけ組み込みように勉強している。その結果、受講生からの反応によって思いもよらず研究が進展することがある<sup>3)</sup>。とくに、若者とともにフィールドに出るときには、地域の方々と予想外に豊かな「化学反応」が起こることがあり、教員としてそうした出会いの触媒となるのが楽しみでもある。

## 4. 頭から手までの全人教育

少人数のクラスでは、野外に出ることも難しくない。学内の環境マネジメントの委員として、分別ゴミ箱の導入をはかることになったとき、地元の材で材料を準備し、1、2年生が受講する「基礎演習」のクラスでこれを組み立てたことがある。晴れば大学の中庭の草の上で大工仕事、雨ならゼミ室で日本語の実用文の書き方などの勉強をする「晴工雨読」である。100個の分別ゴミ箱を完成するために、2年半にわたって半期の演習を5回繰り返す必要があった。工業製品とはちがう、材木の扱い方について、しなやかに動く「賢い体」と、たとえ失敗してもめげない「丈夫な心」を育てるという授業であった<sup>4)</sup>。学校内限定とはいえ、自分たちが授業で作っ

た物が次々に実用に供されるのである。これは、シミュレーションや絵空事になりがちなディベートなどとは異なる「ホンモノ」をつくる経験であった。この取り組みは、この後、キャンパスにあふれる廃棄自転車を再生して留学生に貸し出す「えこチャリ」(「基礎演習」および「地域共生演習」で実施)につながり、現在は、私の担当する3年生の「専門演習」の中で、キャンパス内の森に地元の方の指導をうけて原木椎茸を育てて販売もする「おいしいだけプロジェクト」を続けている<sup>5)</sup>。

## 5. 生涯教育・生涯研究

社会人の受講者から研究上の啓発を受ける例については、上記の3で述べたが、教員としての立ち位置についての励ましや、遠慮のない指摘に学ぶことも少なくない<sup>6)</sup>。ちなみに、上記の女性は、当時の私の研究室の本に女性の人権に関するものが皆無であると指摘し、まず読むべき数冊の本の教示までしてくださいだったのであった。最近しばしば見かけるようになった、社会人が1年生や、編入生や大学院に入学してともに学んでいる姿は年若い在学生や、年下の教員たちにとっても大いなる刺激である。

## 6. 異質の交流

私が授業を地域に公開するようになったきっかけは、1980年代のはじめころ電動車椅子に乗った地域の若者達が、山口大学の教室に現れるようになったことにあった。勝手に押しかけられては授業の運営に迷惑だから大学として取り締まってほしい、という発言をする教員もいたが、私は歓迎だった。教室の前の方に迎え、時々話は話してもらった。脳性マヒによる構音障害があっても、ゆっくり何度も聞きかえす当事者の話は学生にも新鮮なものだった。授業が障碍の有無・世代の違い・国籍や言語の違いといった差異を超えた交流と学びの場になれば、これほど面白いことはないと思ったのである。2003年12月には、不登校の子どもの親の会である「かめの会」のネットワークで山口県立大学に安積遊歩さんを招いて「違うって素敵なこと」という公開授業とワークショップをしていただいた。この時にも、何人もの車椅子使用者が来て下さった<sup>7)</sup>。2012年度の山口県立大学の英語によるゼミ(「アフリカ社会文化論b」)への学内からの受講生が中国からの留学生ただ一人だったとき、SNSのFacebookで呼びかけて3人の地域の受講者が参加してくださり、ようやくゼミの姿をとった授業ができたこともある<sup>8)</sup>。

## 7. 地平線を開拓する

これは、人類の直面する第一線の課題に生活者と

しての現場でいどむことである。地域リーダーを教室にお招きしての授業は、まさにそうした課題への挑戦の報告であることが多いから、学生にとっては非常にいい刺激となる。教員自身の地域での経験の報告も内容によっては有効である。山口県立大学の客員教授の人選は、なるべく大学教員ではなく、世界的に活躍する実践家を招くことを主なねらいとしている。アフガニスタンを支援しているベシワール会の中村哲医師や、宇宙飛行のあと農家になった秋山豊寛さん、内戦の現場の写真家大石芳野さんなどが最近の例である。

## 8. 雲と水と

この目標は、文明の未熟なおごりを捨て、何のものにもとらわれず、自然の子として大自然に親しみ、雲の流れるように水の流れるように流れてゆくことだ、と川喜田二郎氏は説明している。田舎に合宿やホームステイしておこなっている「地域共生演習」の受け入れ先の中に、このような行き方を励ましてくださる所がいくつもあるが、これは、大学の授業にとどまらず、生涯をかけて追求していくべき課題であろう。安溪(2004b)や当山・安溪(2009)などの、自然から遠くなってしまった若者たちへの教育実践の試みも参考になるかもしれない。

## 環境問題・地域問題授業のめざしたこと

以下、「環境問題」および「地域問題」という授業をいかに設計し、実施し、地域のリーダーを教室へ招くためにどのような工夫をしたかということ、抜粋で紹介しておこう。

以下で紹介するのは、私が山口県立大学に赴任して3年目の1997年度の講義予定である。はじめ少数であった地域のリーダーを招く私的な試みがしだいに定着し幅をひろげてきつつある時期にあたる。大学に授業公開の規程がなかったので、交渉や謝礼などもすべて個人的におこなっている。ただし、地域講師に丸投げするのではなく、コーディネーターとして対話形式の授業となるようにし、話のスピードや話題をコントロールするように努力する。学生や留学生の理解度を超えると思われる専門用語については、極力板書して理解を助けるようにしている。

山口県という地域の環境問題で最大の懸案になる可能性が強い上関原発計画をめぐっては、赴任当初から取り上げていた。これは、社会科学国際フェロシップ(新渡戸フェロシップ)をいただいて、チェルノブイリ事故の直後の1986年から1988年にかけて家族でフランスに滞在した経験から、原発事故の影響による広範な食物汚染と事故後の各国政府の対応などに敏感になって情報を集めていた私としては



必然的な選択であった。もうひとつ、アフリカの熱帯の森に暮らして、地域自給と物々交換による豊かさを守ることでグローバリゼーションの悪影響から逃れる知恵を働かせている人々の生活をフィールドワークした経験を、大都市ではなく、山口の田舎で自分でも実現してみたいと考えていた。具体的には、山間の集落に居を定めて1994年から始めた自給的な稲作や、山口県産材での在来工法による家造りをおこなった経験とそこから得られた人脈を、授業や研究にも生かすということがしだいに可能になったのである。

### 配付資料「環境問題」講義予定（1997年度後期）からの抜粋

環境問題 担当 安溪遊地 水曜日 12:50 から 14:20 D-15教室

■あんけいゆうじ。県立大の国際文化学部の教員。理学部出身で文化人類学担当。アフリカ、西表島、フランスでそれぞれ2年ほど過ごしました。

#### ■受講のころえ

このクラスは、空席があるかぎり、あらゆる形態のモグリ受講（学生・教職員・納税者である一般県民・同時代を生活している地球人）を歓迎しています。なるべく前に座って、授業を活性化して下さることを期待しています。

#### ■講義のねらい

環境問題？身近な食べ物に潜む危険から地球環境問題まで。もう考えただけで頭がいたくなるっていうあなたに。「そういうことは、いずれ自然科学の専門家がきちんと解決してくれるはずだ」と信じているあなたに。「そもそも政府が（あるいは企業が）対応すべき問題である」と決めているあなたに。環境問題というのは、生活者の立場からだれでもとりくめるものであることをお伝えしたいと思います。この講義を通して、これから暮らしていく上で各自が行動する時の指針となるようなものをつかんでもらいたいと思います。具体的には、4つのR（Refuse こんなもの要らない、Reduce こんなに要らない、Reuse まだまだ使える、Recycle 溶かして固めてまた使える）を考えて行動できるようになれば、と願っています。

#### ■講義の概要

この講義は映像資料（ビデオなど）とそれをめぐる討論を重視して進めます。ゲストも迎えて、身のまわりにあふれているさまざまな情報の海を泳いで、足もとから確かなものを見つけだしていきたいものです。後半はオムニバス形式の講義を目指します。

#### ■講義の計画・方法・内容

### 第一部 基本的な考え方を身近な問題で身につける

1. 10/22 「まゆつば技術論」入門—操作された情報に踊らされないために「たよれる仲間ブルト君」「神様パワー」「探る」などのビデオを見ます。
2. 10/29 あなた何を食べていますか？—からだの中の環境問題  
ビデオ「ポストハーベスト農薬汚染」など。
3. 11/5 ええ！？ 本当なの？—化粧品とシャンプーの「目が点になる」話『週刊金曜日』の特集記事を読みます。2500円の化粧品の原価が24円とか。
4. 11/12 Sick house 症候群って知っていますか？—身近に迫る汚染物質群微量の化学物質にさらされ続けることで起こってくるさまざまな問題について。

### 第二部 現場の声に耳をかたむけよう

5. 11/19 どんなゴミを出していますか？—資源回収の現場から特別講師・木曾田悦子さん（リサイクルサークルくるくる学外顧問）との対話
6. 11/26 私が暮らしたゴミゼロ社会—アフリカ・コンゴ民主共和国の森林からの報告  
特別講師・安溪貴子さん（自然が大好き人間）との対話（確定）
7. 12/3 リサイクルできればそれでいいのですか？—デンマークの取り組みから西山正啓監督のビデオ『大量廃棄社会に未来はあるか』を題材に

### 第三部 エネルギーとエントロピーの問題をめぐって

8. 12/10 自然農をめざす私の畑にチェルノブイリからの死の灰が降ってきた特別講師・三浦翠さん（山口県鹿野町）との対話（確定）
9. 12/17 現場の声を聞く—山口県上関町に見る地域と原発の関係について特別講師（交渉中）との対話
10. 12/24 輸入大国日本の未来—物質・エネルギー・エントロピーの面からの再検討  
少しだけ、考え方の大原則のお話をしておきましょう。

#### 第四部 世界の森と日本の森

11. 1/14 破壊される地球の肺・熱帯雨林—  
サラワクの現状と日本人の責任  
特別講師・安溪貴子さんとの対話  
(確定)
12. 1/21 わが家がなんでも自給していたあ  
のころ  
特別講師・白松博之さん(山口県  
阿武町・農林業)との対話(確定)
13. 1/28 うちの木がこんな家になった—日  
本林業の再生にかける夢  
特別講師・白松博之さんとの対話  
(確定)

まとめ 環境問題の解決はあなたの手の中に

14. 2/4 「財布の力」を生かして—グリーン・  
コンシューマーへの道  
特別講師(交渉中)との対話

ゲストの方々とのスケジュール調整が終わって  
いませんので、(確定)と書いた回の順番も変更  
の可能性があります。

#### ■評価方法(略)

■全般についての参考文献(個別のテーマについ  
ては、随時紹介します。)

市川定夫『環境学』藤原書店、5631円+税、  
環境問題の多様さとその根っこについて学びた  
い時にひもとく本です。

別冊宝島『地球・環境読本—地球環境問題  
についてあなたが間違っていること』  
JICC。1000円ぐらい。既成の概念をひっくり  
かえます。

高木善之『地球大予測』綜合法令、1600円。  
ネットワーク地球村からメッセージ。環境破壊  
の実体、人口、資源、エネルギーなどあらゆる  
面から世界の崩壊を予測する。

このようにして、大学の規則に「このようなこと  
をしてはいけない」と書かれていない範囲で、「環  
境問題」授業に地域リーダーを招くオムニバス講義  
と、「空席あるかぎりモグリ受講を受け入れる」と  
いう私的授業公開を続けた<sup>9)</sup>。

そこへ、2001年度末になって、あらたなチャン  
スがやってきた。共通教育の「地域問題」という科  
目を担当してきた農林経済学分野の教員が転勤する  
ことになったのである。こういう場合、学内に担当  
できる教員がいなければ、15回分の講義の予算を  
準備して非常勤講師を捜すことになる。それが難し  
ければ集中講義、やむなく「来年度は開講せず」な  
どとするべき事態である。ところが、誰もこの授業  
の継続のために動いていないことを確かめた私は、  
この誰も拾おうとしないバトンを持って、リレーを

つなごうと考えたのである。ほぼすべての講義を地  
域リーダーを招いて話してもらう、オムニバス講義  
としての「地域問題」科目を実施したいという提案  
である。週1回余分に授業をするという新たな負担  
をみずから買って出るわけだが、実現できれば面白  
いチャレンジではないか。そう考えて急いで次のよ  
うな提案をまとめて、一般教育の会議に提出し、あ  
わせて、従来自腹で払ってきた「環境問題」の地域  
講師の謝金も大学で計上できないか、という要望や、  
近い将来、ティーチング・アシスタント(TA)の  
制度を創設して、教員の負担の大きいオムニバス講  
義におけるコーディネートの手助けを受けられるよ  
うにすることなどを付け加えた。

#### 共通教育の会議に提出した書類の写し(2001 年度)

基礎教養教育連絡会議への確認のお願いとあらた  
なご提案(2002年2月5日)

環境自然系世話人 安溪遊地

#### 1、「地域問題」(人文社会系)の講義について の確認

- ・「地域との共生」「生活者の視点の重視」を理  
念に掲げる本学にとって、きわめて重要な科  
目である。
- ・安溪遊地がコーディネーターをつとめるオム  
ニバス講義として運営。
- ・地域の方を非常勤講師としてお招きし、地域  
が抱える問題をめぐる生の声を聞く。
- ・従来の非常勤講師のような学術的業績ではな  
く、長年の社会的実践経験を評価していただ  
きたい。
- ・学内の教員の参加も求める。
- ・基本的に地域への公開授業とするが、実施方  
法は、開放教育委員会・教務課とも相談する。
- ・山口大学との遠隔授業とすることは、受講生  
の数が限られるため、1年目は困難と考えら  
れる。そのかわり、ビデオ撮影をして、やま  
ぐち情報スーパーネットワークに載せられる  
コンテンツ作りに協力するという方向で検討  
したい。その場合、ティーチングアシスタ  
ント的な役割を果たす学生あるいは、教員が必  
要。
- ・内容のあらまは、シラバス(案)でご確認  
ください。

#### 2、「地域問題」担当の非常勤講師を依頼する 地域の実践者の方々

「地域問題」では8回分、9人の非常勤講  
師を予定しています。

講義予定順にそれぞれの方の肩書きと、お

名前、職業や業績、住所を列記します。くわしくは履歴書をごらんください。

- ・本学の環境を考え行動する学生サークル「くるくるリング」学外顧問、木曾田悦主（えつお）さん、リサイクル業、山口市小鯖。
- ・仁保村づくり塾塾長、吉広利夫さん、山口中央農協仁保育苗センター、山口市仁保。
- ・マロニエの森の会名誉会長、斉藤亘（わたる）さん、建設業、県環境アドバイザー、山口市宮野。+同会長、金子隆文さん、建設業。山口市宮野。（お二人で1回）
- ・「原発いらん！山口ネットワーク」の創始者、三浦翠さん、主婦。鹿野町。
- ・うべ環境倶楽部代表、久保田后子（きみこ）さん、山口県議、宇部市。
- ・WWB／ジャパン事務局長、古川栄美子さん、女性起業支援活動。山口市大内矢田。
- ・ヒューマンスペースきらきら銀魚（ぎんぎょ）代表、大庭（おおば）晴子さん、障害者自立支援活動に従事。山口市朝田。
- ・フリースクールAUC代表、田端満弘さん、不登校の子どもの居場所を運営して15年。山口市折本。
- ・曹洞宗ボランティア会、藤田和彦（わけん）さん。法妙院住職。山口市宮野。

### 3、「環境問題」（環境自然系）の一部をオムニバス形式に変更する提案

- ・「地域問題」（前期）との有機的連携のもと、ほぼ同じ形式でよりグローバルな問題を扱うようにシラバスの内容を変更したい。
- ・通常の講義であるが、そのうち6回分は、安溪遊地がコーディネーターをつとめるオムニバス講義として運営したい。
- ・グローバルな視野をもって活躍されている地域の実践者を非常勤講師としてお招きし、環境問題をめぐる生の声を聞く。
- ・従来の非常勤講師のような学術的業績ではなく、長年の社会的実践経験を評価していただきたい。
- ・学内の教員の参加も求める。生活科学部の谷口さんが、川と魚をめぐる奥田さんの講義に参加してくださる予定。
- ・基本的に地域への公開授業とするが、実施方法は、開放教育委員会・教務課とも相談する。
- ・山口大学との遠隔授業とすることは、受講生の数が例年100人に達するため、困難をとまなうと考えられる。
- ・内容のあらまは、シラバス（案）でご確認ください。

### 4、「環境問題」では5人（ひとり2回）の非常勤講師を予定しています。

- 講義予定順にそれぞれの方の肩書きと、お名前、職業や業績、住所を列記します。くわしくは履歴書をごらんください。
- ・阿武町林業振興会副会長、白松博之さん、農業と林業、阿武町。（2回）
  - ・そうか村塾代表、茂刈達美さん、南日本海漁師、阿武町。
  - ・ブキメラ支援キャンペーン共同代表、村田和子さん、介護相談員、福岡県水巻町。
  - ・長島の自然を守る会代表、高島美登里さん、団体職員、防府市。
  - ・光市環境審議会委員、奥田賢吾さん、2000年環境水質知事賞受賞、画家、光市。

### 5、両方の授業に共通する補足説明

学者・研究者・教員以外の方々の実践に基づくお話をうかがう授業の教育効果は大きい。

常勤教員がつねに出席し、適宜アドバイスをすることで、関連する文献やホームページの提示など学問的な水準も確保される。

出席確認や成績評価も、シラバスにある通り、コーディネーターが責任をもっておこなう。

共通教育として実施する実習系の科目（ボランティア・教養インターンシップ）にとって、実習先を引き受けて下さる可能性のある団体代表との顔合わせという意味もあると、講師予定者にはお願いしている。

また、これは、共通教育連絡会議の審議課題ではないが、国際文化学部として新たに実施する実習系の科目（インターネット実習、専門インターンシップ、地域実習）にもプラスになることを国際文化学部としては期待していることを申し添えたい。

非常勤講師の手当が必要になるが、ふたつの講義を合わせて14回分であり、福岡県からの講師が一人いるだけで、あとはすべて山口県内。うち8名は山口市内であるため、全体として通常の非常勤科目ひとコマの負担で実現できる。2年目には講師陣の入れ替えを計り、2年続けて受講しても、内容に新鮮さがあるように工夫したい。

オムニバス講義の運営方法については、コーディネーターが実施報告書を作成し、他の授業でも導入できるようなノウハウを作成したい。大学の紀要等に掲載していただく予定。

### 6、共通教育に限定せず、本学のこれからの教育についての検討課題をいくつか

オムニバス講義を構想する中で必要性が痛感されたのであるが、本学でもティーチングアシ



スタント（TA）制度を開始すべきこと。すでに山口大では実施され、非常勤講師に渡される時間割にTAの勤務時間表まで示されている。遠隔授業の実施には、不可欠の制度である。遠隔授業担当者への支援として学長が考えておられる財源の一部をTA制度の創出にあてる可能性はないか。例えば本学の大学院生のアルバイトとして実施すれば、充分可能であると考えられる。共通教育にかかわる非常勤教員の配布するプリント作成や非常教員の授業でのビデオ・パソコンの操作など、教務課職員の過重負担の軽減にもつながると考えられる。

近隣の大学における授業のシラバスの入手につとめ、県立大独自の魅力ある授業の開発に資する。山口大学共通教育センターのS課長と電話で話したところでは、毎年3月には、お互いに交換するようにしましょうという線までまとまりそうである。このアイデアについては、学長にもお話ししてあるので、まずは、山口大、芸術短期大、下関市大あたりからはじめてみてはどうか。また、非常勤で出講する本学教員に、シラバスの持ち帰りと本学への寄贈をお願いするというアイデアもありうる。

自由な発想で臨機応変にカリキュラムを開発することが、小規模校のメリットを生かす道である。例えば「地域問題」のような授業は、Y大では実施不可能である、と某学部長がこぼしていた。その理由を問うたところ、非常勤講師の資格認定が、学業成績のみを判断するように硬直化しているためであるとのことであった。他山の石としたい。

共通教育にも授業評価を導入すべきこと。全体で無理なら、希望する教員が独自におこなうことを、大学として支援していただきたい。知的好奇心をうまく刺激でき、学生と地域住民から支持されるような授業を増やしていく。例えばオムニバス講義への積極的な参加は、本学教員にとっても重要なFDの機会となりうると認識している。

#### 添付資料、

- 1) 「地域問題」（前期、金曜日3・4時限を予定）のシラバス案
- 2) 「環境問題」（後期、水曜日5・6時限を予定）のシラバス案
- 3) 両講義の担当予定非常勤講師への実習先開拓の依頼文の写し（省略）
- 4) 山口県立大学臨地実習系受け入れ団体調査票（案）（省略）

この提案は、TAの創設を除き、「環境問題」の非常勤手当については、後期に予算のゆとりがあれば、支払うという条件つきで、無事認められた。15回すべてを実施できない非常勤授業も多いことから、ほぼ認められたということだと理解された。万一予算が足りなくても、これまで通りポケットマネーで払えばよいだけのことだ<sup>10)</sup>。

そこで、講義を引きうけてしてくれそうな地域リーダーのみなさんの了解をとりつけ、シラバスを作成して、地域に配ることにしたのである。大学最寄りのJR宮野駅にも張り出した。以下はその内容である。

#### 「地域問題」「環境問題」公開授業の地域へのPR

山口県立大学公開講義へのおさそい（参加無料です）

以下のように、県立大学の授業を公開する予定です。お誘いあわせのうえ、ご参加くださいますよう、ご案内申し上げます。場所は県立大学旧キャンパス、入って正面突き当たりの本館（旗が立っている建物）3階のA32教室です。事前のお申し込みは不要です。

「地域問題」 世話人 安溪遊地

2002年4月12日から毎週金曜日

10時20分～11時50分

#### ■講義のねらい

わたしたちの生きる地域には、さまざまな問題があります。そうした地域問題の傍観者になるのではなく、生活者の視点から多角的に地域を理解しましょう。そして、地域での問題解決に主体的に取り組んでおられる方々を講師にお招きして、すべての住民が人間として尊重される地域づくりをめざす方法を具体的に学びます。

#### ■講義の概要

現場での様々な経験に学ぶことを通して、「地域との共生」「地域で活躍できる生活者になる方法」「地域からの国際化」はいかにあるべきかをともに考え、問題解決の方法を学びとりましょう。お話を聞いて興味をもったら講師のおられる現場を実際に訪ねてみるのもいいかもしれません。なお、よりグローバルな問題については安溪担当の同じくオムニバス形式の公開授業「環境問題」で扱います。

#### ■講義の計画・方法・内容

複数の講師によるオムニバス講義。山口県内の地域の現場で活躍する方々の生の声に耳を傾け、自由な質疑応答を交わします。すべて公開授業とし、学外の方々の随時の参加を歓迎します。

- 1 4月12日(金)10:20から  
講義のねらいと進め方(安溪)
  - 2 4/19 ゴミ問題と4R=こんなものいらない、こんなにいらない、まだ使える、溶かしてリサイクル(国際文化学部、安溪)
  - 3 4/26 正しいリサイクル方法の実習(リサイクルサークル・くるくる、木曾田悦主)
  - 4 5/10 樫野川の源流を守る(仁保村づくり塾、吉広利夫)
  - 5 5/17 豊かな広葉樹林をよみがえらせる(マロニエの森の会、金子隆文・斉藤亘)
  - 6 5/24 引き裂かれた地域で(原発いらん山口ネットワーク、三浦翠)
  - 7 5/31 もやいなおし—水俣に学ぶ地域の再生過程(安溪)
  - 8 6/7 女性が輝く地域と環境を(うべ環境倶楽部、久保田后子)
  - 9 6/14 失業の時代、女性は起業する(WWB Japan、古川栄美子)
  - 10 6/21 ハンディをもつ人の自立支援と車いすダンス(ヒューマンスペースきらきら銀魚、大庭晴子)
  - 11 6/28 不登校の子どもの居場所を(フリースクールAUC、田端満弘)
  - 12 7/5 ローカルからグローバルへ(安溪遊地・安溪貴子)
  - 13 7/12 この現場の声にどうこたえるか—総合討論(安溪)
  - 14 7/19 まとめと残された課題の検討(安溪)授業評価
- 補講 7/26 地域からの国際協力の実践(曹洞宗ボランティア会、藤田和彦)  
場所は、山口市宮野のお寺 法明院の本堂です。タイ少数民族の少年少女も来てくれます。10時30分までにはきてください。大学から急いで歩けば10分少々です。

「環境問題」担当者 安溪遊地

2002年10月12日(水)

12時50分~14時20分

#### ■講義のねらい

環境問題は自然科学の専門家だけの領域でなく、ローカルな暮らしとグローバルな問題の関連を生活者の立場から気づけば、足下からとりくめる身近なものです。現場の声に耳を傾けながら自分の暮らしが変わっていくことを楽しみましょう!

#### ■講義の概要

環境問題をめぐるさまざまな嘘やマインドコントロールに簡単にだまされないで、操作され

た情報の海を泳ぐことができるようになるために、現場の声を聞いたり、とっておきのビデオを見たりします。同じくオムニバス形式の「地域問題」(前期)とあわせて受講されるとローカルな問題とグローバルな問題の関連がより深く理解できるでしょう。

#### ■講義の計画・方法・内容

安溪が担当しますが、3分の1程度は、学外の方を講師を招いて現場の声を聞くオムニバス形式の公開授業とします。

- 1 10/2(水)12時50分から 環境破壊輸出大国ニッポン(安溪)
- 2 10/9 お化粧は好き? シャンプーしてる? 伝染性清潔症の話(安溪)
- 3 10/16 何を食べていますか? 知難行易(孫文の言葉)(安溪)
- 4 10/23 食糧生産の現場からの証言(山口市の北60キロにある阿武町、農業と農薬をめぐる白松博之さんのお話と白菜の試食)
- 5 10/30 新築病・環境ホルモン・電磁波被害のない自然住宅を(安溪)
- 6 11/6 林業の現場、山で暮らす知恵(白松博之さんのお話2)
- 7 11/13 漁業の現場から(2週間もナホトカ号の重油流出現場のボランティア。「南日本海漁師」茂刈達美さんのお話)
- 8 11/20 工業の現場から(マレーシア・ブキメラ村での日系企業による放射能被爆を内部告発し続けた村田和子さんのお話)
- 9 11/27 チェルノブイリ・もんじゅ・JCO。事故が止まらないわけ(安溪)
- 10 12/4 巨大開発と環境影響評価(アセスメント)の現場から(山口県環境影響調査技術審査委員・安溪貴子さんのお話)
- 11 12/11 自然の声に聞く(長島の自然を守る会、高島美登里さん)
- 12 12/18 日本の北と南の先住者の伝統的な自然観と「流域の思想」(安溪)
- 13 2002/1/8 自然をこわす大規模ODAからフェアトレードへ(安溪)
- 14 1/15 あなたこそ日本の未来—アフリカの森からのメッセージ(安溪)
- 15 1/22 質疑応答と総合討論  
学生による授業評価

#### ■テキスト

使いません。講義開始時に参考文献やHPのリストを示します。

#### ■成績評価の方法

1回目に座ったところがあなたの指定席になります。空席をチェックして出席をとりま



す。授業中のご発言に対して「参加点」をさし上げます。小レポート（自由なテーマで1回以上）800字以内。期末大レポート「私にとっての環境問題」あなたの親しい人への手紙の形で。1200字以上2400字まで。評価法。大レポート70点（気付き点＝隠された真実を見抜く力とそれにもとづいて自分のこととして考える力：30点。学び点＝実践経験と具体的知識〔文献等の引用の仕方をふくむ〕：20点。表現点＝わかりやすい表現力と説得力：10点）。小レポート10点。出席・参加点20点。

### 「地元が先生」から「地域が大学」への展開

地域でさまざまな経験を積んできたエキスパートを教室に招いて、お話を聞き、教員と学生が加わって討論をかわす。これが上記のふたつのオムニバス授業で展開した「地元が先生」という取り組みであった<sup>11)</sup>。「地域問題」授業は、若手の教員にもコーディネーター役に加わってもらい試みや、当時の岩田啓靖学長の発案で、15回の授業の4回程度を県庁職員が県政課題を中心に話すという取り組みを加えながら、オムニバス授業として3年間続けたが、4年目の2005年度に、私がスペインのナバラ州立大学との学術交流のために山口県から5か月間派遣されたのを期に、山口県の歴史・文化・県政課題をめぐる通常の授業に戻されたのであった。非常勤講師としてこの授業に携わられたのは、現在公立大学法人山口県立大学の地域貢献担当理事である辻田昌次氏であった。

上に示した1年目の「地域問題」授業のシラバスを、地域の方に広報していた時、私も会員である山口県環境保全型農業推進研究会の会長であった、中山清次氏にお見せする機会があった。山口女子大学時代に学長であった中山氏は、シラバスに目を通すや「わが大学も、ついにこのような有意義な授業ができる所まで来ましたか。実に感慨無量です」と言ってくれましたが、そのあとすぐに「これから、この地域リーダーたちの現場に学生を立たせるような、そんな授業への展開をぜひ考えてください」と課題を与えられたのであった。

2006年に法人化して「地域貢献型大学」を旗印にかかげることになった新生・山口県立大学では、さまざまな科目がオープンしたが、その中に「地域共生演習」というキャンパスを飛び出しておこなう科目があった。前年スペインから帰国してすぐに、この新科目の主担当となり、現在にいたっているが、その設計から実施にいたる過程、さらに文部科学省の現代GP（地域）事業の支援をうけての展開については、安溪・安溪（2010）に詳しく報告した。かいつまんで言えば「環境問題」と「地域問題」の授

業に非常勤講師として招いてきた地域リーダーたちに、学生実習やホームステイなどの受け入れを打診して、1グループ10人程度の学生を毎年10か所程度の受け入れ先に派遣するという、本学の演習科目としては規模の大きい授業となったのである。その受け皿となってくださったのは、「地域問題」と「環境問題」の講師を引きうけてくださった方々であった。すなわち、地域リーダーを教室に招く「地元が先生」という授業と、学生がキャンパスを飛び出して地域リーダーの現場に立たせていただく「地域が大学」という授業を組み合わせると同時に開講していくことができれば、車の両輪のように、地域に学び地域に貢献する大学としての共通教育を牽引するひとつの大きな力になりうると考えられる。

### 科学技術リテラシーとしての「地域環境」学習

もちろん、「環境問題」をテーマにした授業の場合、それが地域環境を中心に扱うものであるにせよ、地球レベルの環境問題を視野に入れたものとして展開すべきであることは論をまたない。その場合に、自らの経験を熱く語る地域リーダーの話とその現場だけでは、学生への指導として不十分なことが危惧される。

環境問題やその解決策について、政府や専門家からマスコミを通して流される情報と地域の生活者からの生の声の両方に耳を傾けること。そして、それを踏まえて自分でなにが問題であり、その解決のために、いま何が必要かを、受講者自身が考えるということが、「想定外」とされた2010年3月11日以降の原発震災を経験した日本で、いまもっとも重視すべき教育課題であると私は考えている。

「環境問題」授業では、論理的に考えて足下をみなおすという基礎的な訓練にあたる授業も行っている。科学技術に関することは、もう専門家にまかせるしかない、という文系の学生に多い思考停止状態を、解きほぐしていくという「科学技術リテラシー」を身につけさせるという取り組みでもある。地域でさまざまな課題の解決に体当たりしてこられた経験を聞くことと組み合わせることで、メディアによるマインドコントロールに耐性をもつ生活者が育つことを目指しているのである。

例えば、地球温暖化をめぐる「不都合な真実」が喧伝される中、1998年以降は地球が温暖化している観測データがないことや、北極の氷が全部とけても海面は1ミリもあがらないことなどの地球レベルの話。私がアフリカで出会った日本の原発の格納容器の基本設計をしていた人物から直接に聞いた1970年ごろまでに設計された日本の原発は、直下型地震を一切考慮に入れていないという証言。さらには、現在山口県立大学でも取り組まれている「エ

コキヤップ運動」は、2年間に3億4000万個を集めた国民的な取り組みの結果、第三世界に寄付された予防接種ワクチンの額が850万円に過ぎず、それを支えるペット飲料の売り上げが5000分の1程度であるという事実。プルタブ800キロ（＝160万個相当。売り上げにして1億8400万円程度）を集めると2万円強の車椅子1台が寄付されるというシステムとの奇妙な類似性。これらの経験から、飲料業界の売り上げ増の競争に利用される善意のボランティアという図式に気付くというテーマもあるだろう。身近なグリーンウォッシュ（地球にやさしいふり）やブルーウォッシュ（人権に配慮したふり）を見破る力をもった生活者を育てるための教材にはことかかないはずである。

### 目標はどこまで達成されたか—受講生との毎回のやりとりの記録

「環境問題」「地域問題」の授業では、葉書大の紙を毎回配って、感想・質問を書いてもらい、授業の終了時に集めるようにしていた。他の受講生にプラスの影響を与えるような意見と質問を取り上げて入力し、「←マーク」のあとに、コーディネーターや地域講師の答えを加えたものをプリントして次の時間に配布する。いちいち読み上げることはしないが、ここに取り上げられると参加点1点がプラスされると伝えてあるので、自分の感想や質問がないか探しながら、みな熱心に読んでいる。以下、そのごく一部を抜粋してみよう。記名であるから、否定的な意見は少ないのであるが、かなり熱心に取り組んでいる学生が多いことが印象に残る。インターネットを使った無記名での学生授業評価ができるようになってからは、その内容をそのままブログに貼り付けて公開するようにつとめているので、成績との関連を心配せずに学生が自由に記入できる匿名性を保証した場合の評価も参照されたい（ウェブページ「環境問題」授業への匿名学生授業評価）。

### 授業の運営方法と雰囲気について—創造性と人間性

生徒の発言を、大事にする先生の指導方法の意味がわかりました。TVやVTRより、それを見た、個人個人の意見の方が、私の心に残りました。（Nさん）

交流会だったので、ちょっと、いつもと違う雰囲気味が味わえました。いいですねえ、こういうの。（Uさん）

地域問題の授業をとって、いろいろな発見がありました。身近なところでも知らない事が、たくさんあって勉強になりました。たくさんのお会いもあつたし……。 （Kさん）

後期には、こんな授業ないんですか。（Nさん） ←安溪遊地担当の環境問題（水曜日3コマ目）をどうぞ。4人ですが、外部から講師をお呼びします。例によって公開授業です。

環境問題と地域問題の違いは、何ですか？（Sさん） ←昨年までは、環境問題の授業でいっしょくたにやってきたことを、今年は、前期できるだけローカルに地域問題、後期グローバルも見据えながら環境問題と分けてみたのです。

講義のたびに、自分の暮らしについて自分が、ほとんど考えていないと感じます。（Sさん） ←そのことに気づいてもらえたら、もう半分合格なんですよ。

「私にとっての地域問題」を書きだしながら、「問題がある」と感じる事は多くても、それに対して、実際には何も、行動、実践してないと気がきました。（Sさん）

宮野のアパートに住んでいるのに、宮野地域の住民活動（清掃活動など）に参加していない事。（Sさん）

この授業も何かの形で私を、変えてくれると思います。前期が終わった時点で、人間として成長していると思います。（Aさん）

### だまされないために疑問を持ち続ける—科学技術リテラシー

お金を払ってでも、物事の詳しい情報を得ようと思いました。様々な問題が、だんだん身近に感じられるようになりました。（Sさん）

電力が足りるのに原発をつくる理由は何なのか？もしかすると、電気製品の会社とまたお金の関係があって、またその電気製品の会社を潰さないように国もかかわっているのかもしれない!! 原発にこだわるのはどうしてなのだろうか？もしかすると、工事などの建設業との関係もあるかもしれない……。 （Eさん） ←ウーン。なかなか鋭い。今一番高い電気製品はなんでしょう？ ヒント日立・三菱・東芝がつくっている蒸気（1/3）とお湯（2/3）をつくる、付属品こみでひとつ4000億円の機械です。

もし、この世界で電気がなかったらどうなるんですか？（Aさん） ←止まるもの。電気ごたつ、電気いす、自動販売機。エスカレータ、新幹線、モノレール。なぜかうごかんものか、うごいても直線移動が多いねえ。CD聞いたり、ノートパソコン動かすくらいのは、ご家庭の太陽光発電でも充分でしょう。アフリカの森で何年か暮らした経験では、なければならぬ、それなりに楽しくここに暮らせるものでした。これは実感。

先生は、(原発に)賛成ですか？ 反対ですか？（Aさん） ←教室内や、生態学会の会員として発言する

時は、賛否どちらかに偏らないように最大限の努力をしています。個人的意見の交換は、研究室においてください。

授業中なぜずっと電気を付けるんですか？みんな見えるじゃないですか。ずっとつけると、電気代が高くなるじゃないですか？（Aさん）←ほんと！そのとおり。電気代だけじゃなくて、石油も使う。でも、70歳以上の人もいらして、そういう方には付けてさしあげないと暗いんですよ。窓際は明るいんだけど、窓際だけスイッチを消すこともできないシステム（一つのスイッチが点滅させる電灯のグループが白板と平行に配列されている）という現実もあります。

「地域問題」を様々な面から見ていくことに感動しました。「全ては地域につながっているのだなあ」と思いました。（Sさん）

### 他人事（ひとごと）から自分事（わがごと）へ— 学びへのモチベーションを高める

リサイクルと言われると、イマイチ自分に関係している気がしませんでした。今考えると、一番身近で、関係のある問題であるような気がします。（Aさん）

大学の『授業ガイド』ですが、あの紙を一種類に統一することはできないのでしょうか。混ぜれば、一番安い雑紙になるし、しかし、分別することは手間がかかったりする……。それなら全部一緒にすれば……。？（Sさん）

もっともっと深く広く学んでいき、自分の事として考え、行動していくことが必要だと思いました。（Sさん）

今日の授業は、本当に辛い授業でした。奥さんが、原爆症だった人（木曾田さん）の意見も聞いていて、やりきれない思いになりました。（Yさん）

この授業を受けて、山口のことを「地域」と呼ぶだけでなく、日本や世界も、「地域」と呼ぶんだなあと思った。上関の原発などで、もし、瀬戸内のスナメリが絶滅した時、自然保護とか言って、他の所からスナメリを連れてきても、それは瀬戸内のスナメリではないと思う。「世界のどこかにまだいるから、一カ所ぐらい絶滅してもいいや」と思わないで、「世界中でそこにしかない」という意識を、上関の原発を推す人に、持ってほしい。（Hさん）←この川の水は世界の海に流れ込み、世界の海から発生した雲が雨を降らすこと（=いのちを支える水の大循環）に気づけば、世界がひとつの地域であることは明らかですよ。

私は、「自然を守ること」＝「人間を守ることだ」と思う。利益を重視して進むと、そのうち人間を、そして地球を滅ぼすことになると思う。（Tさん）

「プルトニウム」「水俣病」「原爆」今日も、いろいろな事例を見た。私達の実際にできることは、何だろうか。（Sさん）←今おこっていることに注意をおこたらないこと。まずはマスコミでもいいのよ。今日（2002年6月8日）の朝日新聞から（<http://ntt.asahi.com>）の抜粋です。

福島県の佐藤栄佐久知事は3日、東京電力が福島第一原発で今夏にも燃料を入れたいとしているプルサーマル計画について「凍結も含めて検討していきたい」と述べ、国の原子力政策の最大課題の推進に消極的な姿勢を示した。県内の原発立地地域の自治体の首長らとの会談で発言した。（引用終わり）

水俣病のビデオで、お母さんが子供について叫んでいる声と姿で、身が震えました。生（なま）の声だと感じました。あなたは人間ですか？人間ですか？という言葉が、耳から離れません。（Eさん）

今日はずっと胸が苦しかったです。私は喘息を持っています。ひどい発作が起こる度に、どうして私が？という気持ちになります。でも今日のVTRを見て、目頭が熱くなりました。（Mさん）

水俣病と同じように、私も持っている喘息も、経済成長が生んだ病気である。でも水俣でも喘息でも、一番心が辛いのは、親、特に母親だと思う。自分が生んだ子だから。（Iさん）

人間のための産業が、自然を破壊し、結果として人間を傷つけた……ここから、私達が学ぶべき事は多いはずだ。もう二度と、あんな事がないようにするために、「こわい」だけじゃなくて、原因やこれからの対策を、真剣に考えよう、と思う。（Hさん）

水俣病のビデオを見て、母親が叫んで訴えているシーン、あまりに悲痛で泣けてきた。こんなこと、もう2度と起こしちゃいけないと思った。（Yさん）

母親たちの痛々しい叫びを聞いて、泣きそうになった。心に突き刺さった。苦しい。（Mさん）

水俣病は、小学校とかでも教わったのですが、とても他人事として、教わってしまった気がします。過去の事件として扱うのではなく、今、その人たちがどう前進していつているのか「もやい直し」とか、という実態が少しでも分かって良かったです。（Iさん）

今回もとても大事で、重いお話が聞けたと思います。「もやい直し」は、よい言葉だと思います。沈んだ気分が少し浮上しました。（Oさん）

### 一期一会の出会い—異質の交流の力と地元の方 が先生だという気付き

色々な人の意見が聞けて楽しかった。聞けた事によって、興味のある範囲が広がったと思う。（Mさん）

先生の紹介で、仁保の青年部のおじさん（!）たちと知り合う事が、できました。ありがとうございました



ます。今でも、忘年会やら草刈りやら、何かしらのイベントの時には、手伝わせてもらっています（その後の飲み会もたのしみです）。僕は、あのおじさん達が色々と苦労しながらも、のびのびと暮らしているように、それぞれの人が楽しんで毎日をすごしていけるような環境であれば、素敵だと思います。人間が人間らしく生活できるような地域を作りたいです。（Oさん）

本当にこの講義は、毎回毎回、色々な人の人生を聞かせてもらえて、楽しみです。挫折しても何とかやっつけられるすごさだと思います。（Nさん）

最近、大学の講義が窮屈に思えます。退屈ではなく窮屈なんです。幅広い教養を身につけるのは、必要なことだと思いますが、出席……の為だけに出席している自分に、寂しさを感じたりします。この身一つで何かしたい、どこかにいきたい。そこでいろんなものを見たり、聞いたり感じたりして、たくさん吸収したい！！今日の講義の内容は、まさに、私の心を引きつけるものでした。（Kさん）

最近、弟が環境問題に、興味を持ってきた。是非、弟にも参加してほしいと思う。森にゴミを捨てたりする心無い人にも、この講義を聞いてほしい。（Kさん）」←お座りになれる限り大歓迎です。いつでもどうぞ。

これだけ、いろんな人に講義をお願いできるのは、やはり、積極的に活動に参加しているからだ、と思います。私は、色々考えさせられる話が聞けるので、この講義は好きです。←いつも地域に出かけているので「非常勤教授」とあだ名されたことがあります。

来年も単位は取れなくてもいいから、またこの授業を受けたい。（この一期一会みたいな感じが、楽しいんだよなあ）（Kさん）

### 「生きる力」を見つける—理解から納得へ

私は人と関わるのが好きです。でも時々、苦しくなることがあります。人を信じることができなくなって、そんな自分が嫌になって……。そんなこともありました。だけど、今日貴子先生が「起きあがらせてくれたのは人間でした。」と言われたのが、心の中にすーっと入って来ました。私も、やっぱり「人」が周りにいて、その人達と一緒に生きています、と思います。支えられて生きています。（Sさん）

高校までの授業では学べなかった、身近な問題を肌で感じたのが、かなり嬉しい。安溪遊地先生、安溪貴子先生の過去の話も、鳥肌が立ってしまった。私の嫌な過去も思い出した……。でも、そんな過去があるから、今の自分がある。そう思い、今もこれから一生懸命生きたい。そして、私を支えてくれる周りの人に感謝しながら、他の人の役に立つこと

をがんばりたい！！（Yさん）

「自分を好きになろうよ」という言葉が、心にジーンときた。最近ちょっと、学校生活やいろんな事に悩んでいて、頭の中がぐちゃぐちゃだったけど、柔らかい口調で、「自分を好きになろうよ」って言われたとき、解決法が見つかった気がする。（ありがたいございます。）（Aさん）

安積遊歩さんの本『ねえ、自分を好きになろうよ！』を始めの方だけ、パラパラッと読んだだけなのに、涙が出ました。なんだか晴れない気持ちを聞いてもらう、ただそれだけで勇気をもらえる、人間の不思議な力を感じました。（Iさん）

最近の講義では、毎週涙が……。地域環境の講義だけど、私の人間環境向上の、授業のようになっていと思う。（Hさん）

先生の笛は、何回聞いてもいいですな。なんか大げさかもしれないけど、涙でそうになる。鼻がツーンと痛くなって……。 （Iさん）←ガムランなどの音楽は、2万サイクル以上の音が出ていて、機械を通さなければ、それが直接脳を刺激するという学説を芸能山城組の山城祥二さんが述べておられます。

その地域のことを学ぶには、実際暮らしてみても、その地域の人々と触れ合うことが、大切なんだと思った。（Kさん）←それがフィールドワークですね。

地域問題は去年とったけれど、今回のはいろんな人の話が聞けて楽しいと思って、受けました。こんなにそばにおもしろい事（自然の問題もあるけど）が、たくさんあるというのに気付いて、自分としてうれしい。（Hさん）」

この授業では、地元で様々な活動をされている方のお話を伺うことができ、本当に嬉しいです。学生の時に、地域でいろんな事に取り組み、活動されている方々と関わることで得るもの、学ぶことは、多いだろうし、貴重な経験になるだろうと思います。（Sさん）」

### 地域と地球はひとつながりという気付き—インターローカルな人材への道

グローバルレベルの問題も、それ自体いきなり起こるわけではないと思う。ローカルレベルで問題が発生した時点で、防いでいくことができれば、グローバルな問題も起こる事はないんだろうな、と。当たり前ですけど、今日改めて考える事ができました。（Iさん）←そうです。Think locally. Act locally. できる人が育って、それがどの地域にも満ちあふれた時、はじめてグローバルレベルでの解決が見えてくるはずだ、と私は思います。

この授業を受けて、感動しました。自然を愛することは、山口や日本だけではなくて、地球も大切にすることだと思います。（Sさん）」

地球上で起こっていることは、全部私の問題で、私のすることも、地域に、世界に、そして地球につながっているんだということを感じました。そして私たちのすることは、未来に生きる人たちにも、つながっているという事も、忘れてはいけないと思いました。／先祖が生きてきた、私たちが生きていて、そして子孫が生きる、この地球を、これ以上壊してはいけないと、思います。(Sさん) ← Sさん、ありがとう！「自分さえよければ」「今さえよければ」では絶対にいけないという、気づきの重さに押しつぶされそうな気になることがあるかもしれないけれど、毎日のかるやかな取り組みを通して手をつないで自分を、地域を、そして地球の未来を変えて行きましょう。

### 学生が発表する最終回への感想—相互研鑽の喜び

一人ひとりの考え・意見を表現し、お互いの考えを知り、ぶつけ合う授業は、少ないけれど、大切だと思いました。(Sさん)

他の人の考えが聞けることは、ものすごく勉強になります。自分が、どれだけ考えることを避けてきたのか、本当に思い知らされました。(Gさん)

私はこの時間別の授業を取っていますが、今回休講だったので、誰でも参加できるという「地域問題」に、来ました。各個人個人が様々なテーマについて、アツク語っているのが、とても新鮮。(名無しさん)

4人のみなさんの発表は堂々として、内容もすごく良くて、自分がものすごく、小さく感じてしまいました。この講義は、色々な面で成長できますねえ。(Nさん)

この講義を聞いたり、県立大学に来ていろんな人に会ったり、今まで思いもしなかった新しい発見を、すぐ隣にいた人から教えられたり、知らない人の考えに共感しています。(Eさん)

今日は、貴重な体験ができました。同じくらいの年齢の人達の話聞いて、人それぞれが色々なことに目を向けて、自分なりのものに対する考えを持っていることが、よく分かりました。こういう授業が増えたらいいな。(Iさん)

今日は、みんなに刺激されました。私もなにかしたい。自分の生きたい道を見つけたいと、思いました。(Sさん)

これからはもう、ルールに沿って歩くことはやめようと、思います。(Sさん)

### おわりに

来年閉講となる「環境問題」、3年間だけオムニバスでおこなった「地域問題」の狙いをうけつぐはずの共通科目として、山口県立大学の新カリキュラムの中で予定されているのは、文系の学生にも科学

技術リテラシーをという「科学と社会」および「地域環境」の授業である。重要な情報の秘匿や、大規模な人災による悲劇を防ぎ、山口県の、そして参加する学生のそれぞれの国の未来に対して、主権者として政策提言をしていける力をもつ生活者を育てるために、1) 地域の教育力を大学の共通教育の授業に生かし、2) それぞれの地域リーダーの現場で学生たちが学ぶという実習授業にうまくリンクさせることと、3) 地域での実践に触れることを通してみがかれる科学技術リテラシーの涵養のために、これまでのさまざまな授業改革の取り組みの資産が、今後には生かされることを願ってやまない。たくさんの励ましと深いご縁をいただいたみなさんに心から感謝申し上げるしだいである。

### 注

1) この報告ではとりあげないが、国際文化学部の外国を含む地域で学ぶ授業「地域実習Ⅰ」および「地域実習Ⅱ」のオムニバス授業も安溪が主担当として実施している。このプログラムの一部については、2012年から5年間の予定で、文部科学省の「グローバル人材育成推進事業」の助成を受けて、世界の田舎をつないで輝かせる「インターローカル人材」の育成をめざしている。

2) 例えば、山口県立大学では、通常前年の12月にシラバスの教員からの原稿を締め切るのが現在の決まりであるが、2011年4月からの私の担当の「環境問題」授業のシラバスでは、最終の校正段階で3月11日の東日本大震災を踏まえたものに変えて公開した。

3) とくに、受講生に社会人を含む場合に、教育と研究が接近することが多々ある。例えば、授業でアフリカのコンゴの森の神話研究の現在進行形での紹介をしたとき、パソコンのOSがMS-DOSだった時にはKoa-technomateというソフトで容易に入力できたバントゥー緒語のアクセント記号の表示が、ウィンドウズに変わってから、非常に難しくなって研究発表が10年も滞っているということを授業で話した。そのあと、受講しておられた地域の受講生のお一人が、TeX(テフ)というソフトならどんなOSでも書けるということに気づき、その実際の入力方法まで調べあげて、手ほどきして下さったのであった。数日して「できました！」というファックスが届き、そこに、ソングーラ語の字母が並んでいるのを見たときの感動は忘れられない。そのおかげで、国際音標文字や500枚に及ぶイラストを含む600頁を超える研究報告(安溪貴子, 2009)を版下から作り上げるこ

が可能になった。また、別の例では、文化人類学の授業を受講して下さった地域の方が、毎回の講義録をつくって、「文も通信」(=文化人類学もぐり通信)として印刷し知人に配布しておられたのを後に気付いたことがある。読ませてもらおうと屋久島での樹木の伐採の伝統的な作法についてお話しした回には、講師自身が気付いていなかった「鳥総立(とぶさたて)」についての複数の史料が引用されていて、その共通性の指摘に大いに啓発されたのであった。

- 4) 1クラス10人が半年かけて、2人1組の学生が4つの分別ゴミ箱をつくるというゆっくりしたペースであった。プラモデルのように組み立てるのではなく、素材としてひとつひとつが異なる杉材の「元と末」「木表と木裏」「赤身と白太」「柀目と板目」「生き節と死に節」、切り時をいう「木六竹八」、割りやすい方向をいう「木元竹末(うら)」などの伝承も説明してから組み立てにかかる。板の端に釘を打っても板が割れないようにするコツや、ネジの頭をつぶさないようにインパクトドライバーを使う経験がこれに続く。さらに、間伐や枝打ちといった手入れの不足などの日本林業のかかえる構造的な問題、コンクリートパネルや合板の家具を使うことによる熱帯林の破壊などについても理解させる。塗装とシックハウス、木と語る南島の伝承、飛鳥時代からの宮大工の匠の技など、宮大工の棟梁とともに自分の家を建てた経験(安溪、2003)を生かして、手を動かしながらの木をめぐる話題は尽きない。仕上げたら、普通は目に見えないところに制作者のサインを入れて、大学に納入する。ちなみに、木のゴミ箱の材料費は100個で50万円であった
- 5) 原木に菌を打ってから椎茸ができるまで2度梅雨を越えなければならないため、学生たちは、卒業した先輩が以前に準備した原木を利用し、自分たちは後輩のために原木を準備しておく。これは、世代を継承する順送りのプロジェクトであるが、この場合の問題点は、担当教員の継承性がなかなか難しいことであろう。
- 6) 注1の「文も通信」発行者の女性は、当時の私の研究室を訪ねて、蔵書の人権コーナーに女性の人権に関するものが皆無であると指摘し、まず読むべき数冊の本の貸し出しまでして下さったのであった。また、大学教員になってすぐのころ、一人の1年生が、私のすべての授業に顔をだすようになった。大きな「アパルトヘイトNON!」の缶バッジを付けて最前列で授業を聞いている、人権感覚のするどい彼女の反応に背中をおされるようにして、私は国際的な

人権擁護団体アムネスティ・インターナショナルの山口グループの創設にかかわり、教室の外でも人権について発言する機会を得て、やがて自然を守る運動の仲間とともに街にも出るようになっていった。このように、年の離れた、意識の高い学生に育ててもらうことで「ただの教員」の道を踏み外していったのである(安溪、2012: 154)。

- 7) 会場は新キャンパスのF204教室であった。この教室は、固定席200と前方の車椅子用スペース4つの204人収容であるところから命名されたのだが、そのことがきちんと伝承されていないようである。
- 8) 公式の公開授業ではないので、もちろん授業料は徴収しない。そのかわり、大学の事務的バックアップはないので休講などの連絡は、講師が自分で行わなければならない、修了証も発行されない。地域の受講生は、非公式・公式の受講にかかわらず「コミュニケーションボード」が使えないという現状から、メンバー限定のFacebookグループを設定して、意見交換をおこなうという工夫をした。
- 9) 2013年度現在は、私が関係する授業では共通教育の「環境問題」、学部の「アフリカ社会文化論」、大学院の「生命と生活の質特論」「暮らしの人類学」の4つが大学としての公開授業の指定を受けており、地域の方や大学院修了生が学んで下さっている。
- 10) 公教育では、政治活動や宗教活動をしない、ということさえきちんと了解しあっていれば、議員や首長や宗教者を招くことにも問題はなく、地域リーダーとして授業にお招きした方が、議員・市長として活躍されるなどの例もある。
- 11) やや類似した試みとして、同時期に、赤羽潔社会福祉学部教授による、ユニークな活動をしている学生や卒業生を講師に招く「ライフ・ヒストリーに学ぶ」という科目がおこなわれていた。

## 引用文献

- 安溪貴子『森の人との対話—熱帯アフリカ・ソングローラの暮らしの植物誌』アジア・アフリカ言語文化叢書47: 1-614、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(2009)
- 安溪遊地『『生命と生活の質特論』のめざすもの—山口県立大学大学院における教育実践の報告』『山口県立大学大学院論集』4: A81-A90(2003)
- 安溪遊地編『やまぐちは日本—海・山・川のことづて』弦書房(2004a)
- 安溪遊地『生き物に語りかけてみる—実践アニミズム入門』『Biostory』2: 94-105(2004b)



- 安溪遊地編『続・やまぐちは日本—女たちの挑戦』  
弦書房 (2006)
- 安溪遊地「いつでもどこでも移動大学——川喜田二  
郎先生にいただいたもの」『地平線』47、広島 KJ  
法研究会 (2009) (<http://ankei.jp/yuji/?n=785>)
- 安溪遊地・安溪貴子、2009『大学生をムラに呼ぼう—  
地域づくり実践事例集』みずのわ出版
- 安溪遊地・安溪貴子、2010『大学生とマチに出よう  
—地域共生授業をつくる』みずのわ出版
- 川喜田二郎編著『移動大学—日本列島を教科書とし  
て』鹿島出版会 (1971)
- 川喜田二郎『ひろばの創造—移動大学の実験』中央  
公論社 (1977)
- 当山昌直・安溪遊地『野山がコンビニ—沖縄島のく  
らし』(聞き書き・島の生活誌 1)、ボーダーイン  
ク (2009)
- 宮本常一・安溪遊地『調査されるという迷惑—  
フィールドに出る前に読んでおく本』みずのわ出  
版 (2008)
- 山口県立大学国際文化学部フィールドワーク実践  
論チーム『キャンパスを飛び出そう—フィールド  
ワークの海に漕ぎだすあなたへ』みずのわ出版  
(2012)

### 引用ウェブページ

- 環境問題授業への学生の匿名授業評価 2009 年度  
<http://ankei.jp/yuji/?n=780>、2008 年度 <http://ankei.jp/yuji/?n=587>、2007 年度 <http://ankei.jp/yuji/?n=11> (2013 年 12 月 8 日閲覧)
- 鬼頭秀一・安溪遊地「デスマッチからライブへ——  
環境教育をめぐる表面的対立からの解放をもとめ  
て」<http://ankei.jp/yuji/?n=1627> (2012 年 1 月  
25 日掲載)
- 地域問題授業での学生の声 (2002 年度) その 1  
<http://ankei.jp/yuji/?n=1939> その 2、その 3 と  
続く (2013 年 12 月 8 日掲載)

